

## 踏歌神事

踏歌神事とは、中国にルーツを持つ古代の正月神事である。日本の奈良時代(710-794)および平安時代(794-1185)に朝廷で行われていたもので、名古屋の住吉大社や熱田神宮など、いくつかの神社で形を変えて残っている。

この儀式の中心的な役割は2人の神職である。1人は梅の枝を持ち、漁師の守護神である恵比寿を表し、もう1人は餅の入った袋を持ち、農民の守護神である大黒天を表している。まず、第一本宮の前に神職たちが少し離れて向かい合って立つ。彼らは挨拶(一連の短い応答のフレーズ)を交わし、場所を替えるまで毎回3歩ずつ前進する。(「踏歌」という言葉は、「踏む」と「歌う」を合わせたものである。)大黒天が住吉大社の神々に餅を奉納する。

中世にはこれを模したものが世俗的な祝いの席でとりあげられ、千寿万歳と呼ばれるようになった。地域ごとにバリエーションが発達し、漫才として娯楽の一形態となった。現在、漫才といえば、大阪を中心とした日本のショービジネスの定番である二人組の漫才を指す。